

学位論文内容の要旨

学位申請者	山田 小夜歌 【比較社会文化学専攻 平成26年度生】 (平成30年3月単位修得退学)	要 旨
論文題目	大正期日本における G. V. ローシーの活動と背景： 世紀転換期西欧のバレエ文化とその移入	大正期日本の帝国劇場に招聘されたバレエ教師・振付・演出家ジョヴァンニ・ヴィットリオ・ローシーGiovanni Vittorio Rosi (1867.10.21-1940.4.7?) は、日本で初めて「正統」にして「本格的」なバレエを教え、洋舞発祥の種を蒔いた先駆的人物であるという肯定的な評価の一方で、日本におけるバレエ発展への永続的な貢献に至らなかったことが度々指摘されてきた。
審査委員	(主査) 教授 猪崎 弥生	本論文の目的は、ローシーについて、来日以前の芸歴および評価と日本滞在中の活動の内実を解明し、それらの影響関係に着目して検討することによって、ローシーが西欧で体得したバレエとはどのようなものだったのか、またそのバレエの日本への移入はいかなるかたちで試みられたのか、その様相を明らかにすることにある。 第1章および第2章では、舞踊家ローシーをかたちづくったイタリアと英国ロンドンでの活動に着目し、これまで曖昧だった彼の訓練歴と出演歴を史資料から可能な限り明らかにした。第3章では、ローシー以前の日本における西欧の上演舞踊が、主に洋行経験のある知識人たちによって受容されていたことを確認した。第4章では、ローシー日本滞在中約5年半の活動の軌跡を時系列に整理し、上演作品、公演日時・場所、ローシー関与の実際を一次資料によって裏付け、ローシーの帝劇やローヤル館を中心とする多彩な上演活動を明らかにした。第5章では、ローシーをかたちづくっていた西欧のバレエが、直接または改良を加えられながら移入されていくさまを確認した。第6章では、ローシー離日後のローシー本人と元教え子たちそれぞれの活動を追い、ローシー由来のバレエの多様な継承の様相を明らかにした。 以上から、ローシーが大正期日本において試みた上演活動、すなわち、スペクタクル要素を含んだ種々雑多でジャンルを超越した作品の上演と、バレエの専門的技法とマイム表現法双方の習得を重んじる二本柱の指導実践は、まさに彼が来日前に享受したバレエ観に裏付けされたものであった。ローシーの一連の活動によって輸入されたバレエは、単なる日本バレエ前史としてではなく、続く近代日本の舞踊、音楽、演劇活動の基礎の一端を培った点に、その多元的なバレエ文化としての意義を再評価できると結論づけている。
	准教授 中村 美奈子	
	教授 神田 由築	
	准教授 井上 登喜子	
	教授 貫 成人 (専修大学哲学科)	
	(副査) 教授 山田 小夜歌	